学科･専攻名	国文学科

教育課程・学習成果の検証

1．学科・専攻の「開講科目数（必修・選択必修・その他）」「非常勤講師比率」「学生の入学から卒業までの平均受講科目数」等のデータを参考に、学生の受講科目数に対して開講科目数は適切か、非常勤講師比率は適切か、学生にとって体系的な科目編成となっているか等を検証

【検証結果（全体概要）】

国文学科においては、「教育課程編成・実施の方針」に基づき、1 年次の国文学・国語学に関する基礎的知識の獲得から、4 年次における卒業論文作成へと順を追って専門性を高めることができるよう、各科目の連携・関連を図り、体系的な教育課程を編成し実施している。1 年次には古典文法の学び直しから始まり（入門演習 A)、国文学・国語学に関する基礎知識を身に付け（国文学基礎講座・国語学概説・国語史・国文学史など)、さらにくずし字解読の技能を修得する（入門演習 B）ことによって、次年度以降に必要な基礎学力を養う。さらに 1・2 年次を通して発展的授業（各時代・分野別の講読）を履修することにより多様な知識を深め、研究の方法論を学ぶとともに、2 年次の基礎演習においては調査能力を身に付ける。また、京都の歴史・風土に触れるための実地学習を行い、近隣に史跡や社寺が多い本学の立地を生かした学びを実施している。3 年次には、特殊講義などで専門的知識をさらに高めると同時に、演習科目を国文学の各時代及び国語学・漢文学の分野の中から 2 つ選択し、主体的調査・批判能力、合理的思考力を養う。4 年次では学びの集大成として卒業論文を作成し、一段と高い専門的知識と技能を身に付け、課題発見・解決能力を養う。その結果、生涯にわたって学び続ける能力の確立を目指している。カリキュラム全体は国語史・国文学史・講読・特殊講義などが相互の関連を持ちながら体系的に編成しており、上代国文学から近代国文学、国語学、漢文学・民俗学まで幅広い分野の講義科目を開設している。さらに、演習科目も入門演習から基礎演習・演習 I・演習 II と 4 年間続けて履修することで、アクティブラーニング・少人数での教育を実施している。また国文学科の専門科目については、学生たちからも比較的高い評価を得ている。2018 年度学生生活実態調査結果では、「専門科目の授業内容が充実している」の数値が 0.91（全学で 3 番目に高い数値。大学平均 0.79）であった。以上のように、国文学科においては、学生にとって体系的な科目編成がなされており、科目の内容についても学生たちからも一定の評価を得ていることがうかがえる。

2017～19 年度までの国文学科卒業生の平均受講科目数は 88.0 である（全体平均は 84.3)。国文学科における開講科目数の状況は、2017 年度は選択 92、必修 112（計 204 科目)、2018 年度は選択 110、必修 83（計 193 科目)、2019 年度は選択 115、必修 82（計 197 科目）となっている。以上の開講科目数は、学生の受講科目数に対して適切なものと考えられる。

また、国文学科では、必修科目・演習科目、および教職課程の「教科に関する科目」の必修科目については、原則として専任教員が担当している。演習科目においては、できる限りきめこまやかに少人数授業を実施できるように、一人の教員が 2 クラス（2 コマ分）担当することもある。また、必修科目・演習科目、および教職課程の「教科に関する科目」の必修科目以外の科目についても、可能な限り、専任教員が、担当ノルマの範囲で担当するとともに、各分野で活躍されている非常勤講師を招いて指導を仰ぐことで、学生たちの関心に幅広く応えられるようにしている。

このような方針に基づき、毎年度、科目担当を決定しており、全学的に見ても、国文学科の非常勤講師比率は、比較的低い数値となっている（2018 年度は全体平均 40.01、国文学科 23.40。2019 年度は全体平均 39.02、国文学科 25.93)。このことから、国文学科においては、専任教員による責任体制が取られており、非常勤比率も適切であるといえる。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

２．「卒業時アンケート」「PROG（ジェネリックスキルテスト）結果」「学修行動比較調査」「進路・就職状況」「免許・資格取得状況」「休学・退学・留年数」「授業アンケート結果」等のデータを参考に、学科・専攻の教育について、効果が挙がっている点、改善すべき点を検証

【検証結果（全体概要）】

2018～2020 年の「卒業時アンケート」の「項目別満足度」において、国文学科の卒業生の満足度が全体の数値より 5 ポイント以上高い項目として、「歴史や伝統を感じることができる」（2019、2020 年）があげられる。これについては、本シート 1 で記したように、国文学科では、本学の立地を活かして、教室での授業や実地において、京都の言葉・文学・文化・風土・歴史などに触れて理解を深める機会が多いことが、一定の効果をあげている可能性が考えられる。

また、同アンケートの「身についた能力」において、国文学科の卒業生の満足度が全体の数値より5ポイント以上高い項目として、「物事を論理的に考える力」（2018、2020年）があげられる。これについても、本シート1で記した4年次までの学び、および、その集大成である卒業論文の作成に取り組んだことなども関係していると考えられる。

同アンケートの「成長の機会」において、国文学科の卒業生の「卒業論文・制作を仕上げたこと」という項目の数値が、2018～2020年通じて特に高いことも、そのことを裏付けよう。自ら課題を発見し、資料を収集検討して、論理的に思考した結果をまとめあげていく卒業論文の作成に取り組むことが、国文学科の学生たちにとって、自らを成長させ、「物事を論理的に考える力」を身に付ける重要な機会であると考えられる。

一方、同アンケートの「項目別満足度」において、国文学科の卒業生の満足度が全体の数値より 5～10 ポイント以上低い項目として、「目指す資格が取得できる」「将来の職業に役立つ知識・技術を身につけられる授業が多い」（2018～2020 年）、「実習が充実している」（2018、2020 年）、「授業で他人と協力して物事を進める機会が多い」（2020 年）などがあげられる。これらは、国文学科では、「進路に直結する授業が少ない」、「他者と協力しながら物事を進める授業が少ない」、「実習をともなう授業が少ない」ということを示している。2018 年度学生生活実態調査結果によると、「体験学習、グループディスカッション、ディベート、グループワーク等のアクティブラーニングによる授業が多い」のポイントが、国文学科では、0.15（大学平均 0.26）であり、やや低い数値となっていることとも一致する。

確かに、一見すると、国文学科では、「将来に直結する授業が少ない」かもしれないが、在学中に身に付けた「物事を論理的に考える力」や「課題発見・解決能力」は、あらゆる職業で活かされていくものと考えられる。国文学科の学生たちには、国文学科での学びが将来に活かされていくということを指導・助言していくことが必要であろう。

国文学科では、教員免許を取得する学生が一定数存在し、2017～19 年度の進路就職状況を見ても、就職決定者の約 12～18%が教員として就職していることなども、学科での学びと進路との関連性という点において、評価してもよい点である。さらに、2020 年度より、国文学科では、日本語教師の資格も取得可能となり、学生たちの資格取得の機会が広がった。

また、「他者と協力しながら物事を進める授業が少ない」という点についてだが、国文学科でも、演習の発表について受講生同士で討議し、お互いの研究を深めていくという機会を多く持っており、これなどは、まさに「他者と協力しながら物事を進める授業」といえよう。2019 年度に実施した「ジェネリックスキル測定テスト」結果では、国文学科の 3 回生が 1 回生時よりも向上した項目として、「課題発見能力」「言語処理能力」「非言語処理能力」などがあがっている。これらの能力も、専門的な演習での発表や討議を通して身に付いていく能力であろう。

なお、人前での発言や、人に意見を言われることに対して苦手意識を持つ学生がいることも想定されるため、そのような学生たちでも気兼ねなく参加できるように、教員側の工夫も必要となってくる。たとえば、発表に対してグループごとに話し合わせ、個人の意見ではなく、グループで集約した意見を発言させることなどが一案である。また、発言の際には、相手に対する敬意を持って発言するように指導することも肝要である。

「実習をともなう授業が少ない」という点は、国文学科の学びの特性上、やむを得ないといえよう。しかし、近年、国文学科でも、講義に実習を取り入れて学びを深めるという試みも見え始めている。たとえば、非常勤講師が担当する特殊

講義では、江戸時代の絵本である黄表紙について講義するとともに、黄表紙の製本を行う実習も取り入れ、当時の資料に描かれた本屋業界の様子を参照しながら製本を行うことで、当時の本の形式と内容のとの関わり方について、学生たちの理解を深めている（本講義は、2018 年度前期京都女子大学「学生アンケートによる優秀授業賞」を受賞）。加えて、2019 年度からは、専任教員が担当する特殊講義において、狂言の歴史などについて講義するとともに、狂言の実技体験なども取り入れ、実演を通して狂言の本質とその魅力に対する理解を深めるという試みを始めている。本講義については、「大学案内」や本学のホームページの学科紹介のページにも掲載している。

国文学科における課題としては、休学者と退学者が全学の平均に比して、比較的多いという点が挙げられる（例えば、2019 年度は在学生数 543 名に対し、休学者が 19 名、退学率 2.4%［全学平均 1.0%］）。この課題は国文学科に限定されるものではなく、文学部全体を通じての課題でもあり、2019 年度の教授会においても学部長による問題提起がなされた。

ただし、休学や退学については学生一人ひとりの事情が異なるため、学生生活センター・学生相談室・健康管理センターなどとも連携して、ある程度時間をかけて慎重に原因を分析し、対策を講じていくしかないと考える。近年、休学や退学の理由として見受けられるのは、「体調不良」や「進路再考」などである。特に「進路再考」の場合は、休学・退学願を出すまでに、少しでも早く学生の悩みを把握して、面談などを通して慰留できることが望ましいであろう。国文学科でも、必修科目を中心に、学生の履修状況や学修状況などについて、随時、学科会議で情報共有を行い、指導が必要な学生に対して迅速に対応できるような体制を整えている。今後も、このような体制を維持し、少しでも休学者と退学者を減少できるように努めていく所存である。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

特筆すべき事項なし。

３．学科・専攻として、教育の質向上・改善に向けた組織的な取り組み（FD）をおこなっているか。おこなっている場合、それはどのような内容か、どのような課題認識に基づくものか。

【検証結果（全体概要）】

教育活動（授業の分かりやすさ、履修指導、学生の意見のフィードバック等）に対する学生の満足度については、「授業評価アンケート」や「学生生活実態調査」を基に、学科内 FD 活動として学科会議で検証している。1 年次対象の「入門演習」、2 年次対象の「基礎演習」の授業内容・方法、成績評価の方法について毎年度末、学科会議にて協議している。

また、本シート 2 で記したように、国文学科では、休学者や退学者を少しでも減らすことができるよう、必修科目を中心に、学生の履修状況や学修状況などについて、随時、学科会議で情報共有を行い、指導が必要な学生に対して迅速に対応できるような体制を整えている。

また、初年次の少人数授業を充実させるために、1 年次対象の「入門演習」については、国文学科の教員同士で検討を重ね、古典文法のテキスト（「入門演習Ａ」）、古典文法の復習のための教材（「入門演習Ａ」）、くずし字解読の技能習得のための教材（「入門演習Ｂ」）を作成し、教材の開発と改訂につとめている。「学科・専攻の FD の取り組み」の経費として大学から配分される予算を利用して、くずし字解読に関する市販のテキストなども複数購入し、教材の開発と改訂の際の参考にしている（「入門演習Ｂ」）。

より充実した教育を行うための教員の研究活動については、教員業績データベースを用いて、大学のホームページで公開している。また、研究の活性化を図るべく、京都女子大学国文学会の機関誌『女子大國文』を年 2 回刊行しており、所属教員に投稿を呼びかけている。投稿論文については、所属教員から選ばれた委員による編集委員会にて厳正に審査し、審査結果を編集会議にて協議し、採否を決定している。2016 年度からは「京都女子大学教員業績評価に関する規程」に基づき、前年度業績の評価を行い、学部長・学長による評価を受けて改善活動等に取り組んでいる。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

2019 年度後期の授業アンケートにおいて、国文学科では、授業内容に関する評価は、全体平均・大学平均よりも 0.1～0.2 程度高く、学科の授業に対して、一定の評価が得られていることがわかる。殊に、「授業への熱意」への評価を「5」と回答する学生が半分以上、「4」と合わせると 9 割を超えるというデータは、このことを強く示している。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

2019 年度後期の授業アンケートにおいて、国文学科では、「資料やテキストのわかりやすさ」のみ、「5」の回答が 4 割を切っているので、改善の余地がある。改善施策としては、それぞれの科目のアンケートの自由記述欄に記された学生の意見や要望を集約して、それに対応できるように資料を作成していくということであろう。

毎年度、国文学科では、「学科・専攻の FD の取り組み」の経費として大学から配分される予算を利用して、コピーカードを購入し、できる限り、カラー図版などを掲載した資料を学生に提供して理解を深めるようにつとめている。このような取り組みも、「資料やテキストのわかりやすさ」を向上させるものであるので、今後も継続していきたい。

なお、2020 年度は、新型コロナウィルスの感染拡大防止の観点から、前期はすべてオンライン授業で実施され、後期も、対面授業とオンライン授業を併用することになる。オンライン授業においては、京女ポータルのＬＭＳに資料をアップする形になるが、対面授業で配布する資料とは、また違った工夫が求められる。オンライン授業における資料についても、学生たちの意見や要望を参考にしながら、「わかりやすさ」を向上させていく必要がある。

４．教員組織の編成（採用・昇任等）にあたって、職位構成および年齢構成のバランスに配慮した編成をおこなっているか。また、カリキュラムに基づく教員組織となっているか。

【検証結果（全体概要）】

国文学科の 2020 年度における教員数は 13 名、年齢構成は、60 代 2 名、50 代 6 名、40 代 2 名、30 代 3 名で、男女比は男性 7/女性 6、教授 9 名、准教授 1 名、講師 3 名という構成である。外国人教員は所属していない。

学科としてのカリキュラム・ポリシーを踏まえ、国文学領域、国語学領域、漢文学領域で構成される教育課程・開講科目に対し、上代文学 1 名、中古文学 2 名、中世文学 2 名、近世文学 2 名、近代文学 2 名、漢文学 1 名、国語学 2 名、仏教学 1 名というように幅広い分野・時代に亘る教員を配置しており、担当科目と各研究分野が整合するものとなっている。教員組織とそれぞれの研究分野については、「大学案内」や大学ホームページに公表されている。

【成果および向上施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

30 代の教員や女性教員が増え、年齢構成および性別においてバランスが取れた形になった。また、2007 年度以来 1 名であった中古文学の教員が、2018 年度より 2 名となり、当該分野での学生たちの学びを、さらに充実させることができた。

【課題および改善施策】※無い場合は「特筆すべき事項なし」と記入。

50 代の教員が多いことを鑑み、今後の人事においては、職位や年齢のバランスを考えて検討を行う必要がある。